

Publisher's Review

パブリッシャーズ・レビュー

●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●



みすず書房の本棚

[無料送付]

No.5 2012冬

(表示価格は消費税込です)

113-0033 東京都文京区本郷 5-32-21 tel. 03-3814-0131 http://www.msz.co.jp

『サイド音楽評論』を読む

奥波一秀

カイロでフルトヴェングラーを
バイロイトでクナッパブツツシ
を聴いたサイドには、それだけ
も羨望を禁じえないが、ニュー
クを中心とした世界各地の音楽
祭やコンサートを聴いてまわ
るそのマニアぶり、妻マリ
アムのまえがきにもあるよう
に、趣味のレベルを大きく超
えている。本書でも紹介され
るグールドの場合が顕著なよ
うに、あるいは教会音楽の実
践伝統を踏まえてピアノ教
本を編んだとされるバイエル
の場合と同じように、サイドに
対して本書にまとめられた
個別事例を通してサイドの趣
味や判断力(鑑識眼)を伝える
もので、側面から彼の音楽論
を補完している(サイドの音
楽論の同伴者アドルノにつ
いても、その音楽批評の翻訳
の意味が待たれる)。

サイドが拘るのは、音楽祭の
趣旨・企画やコンサート・プ
ログラムの組み方に現れる「
知性」である。「花見弁当」
的なプログラムには、いく
ら奏者と曲目がよくても触
手は動かない。そうした「知
性」の観点から高く評価す
るのはポリニーやブレン
デルである。とはいえ、ポ
リニーの演奏の変質ぶりには
忌憚らない批判を浴びせて
おり、ホロヴィッツの演奏
を「ひびが入ってる」「骨
董」と評した吉田秀和を思
わせるところも

四十代前半で発表した『オリ
エンタリズム』でサイドが世
界に衝撃を与えてから来年で
三十五年。没後早くも十年を
迎える。二十世紀を代表す
る思想家の一人である彼は、
じつはかつてシェーンベルク
の愛弟子E・シュトイアー
マンに師事したピアノニスト
でもあり、西洋クラシック
音楽に造詣が深かった。音楽
愛好家には『音楽のエラボ
レーション』『パレンボイム』
/『サイド音楽と社会』の著
者としてすでに親しまれて
いることだろう。しかしこの
分野におけるサイドの仕事の
中心は『サネーション』誌は
じめ新聞や雑誌への執筆で
あり、これは日本ではもと
より本国でも、生前には単
行本として蓄積されることが
なかった。本書は一九八三年
から二十年にわたって厚い
信頼を集めたその音楽評論

を

もうひとつのライフワーク

エドワード・W・サイド

《『サイド音楽評論』全2巻》

二木麻里訳



初めて集成したものである。
「思想と同じように、音楽にお
いては小さな細部が精密に調
和すること、初めて大きな視
野が生まれるのである。コン
サートや演奏に接するときの
サイドはこうした細部に目を
向けていた。「中略」主題に
ついて知的に表現するための
知識を持たない批評家や、先
入観なしに聴く能力が欠け
ている批評家もいるが、サイ
ドは多くの点でそうした批評

の『指環』(一九五八)を聴い
ては、その指揮ぶりについて
の踏み込んだ言及がないのは
残念。理論的な面では、他の
著作同様アドルノが頻りに
参照されるが、ただ追従して
いるわけではない。たとえば
、アドルノが同時代人として
リヒャルト・シュトラウスに
下した評価は不当に低すぎる
、とサイドはみている。新ウ
ィーン学派に肩入れしていた
からで、それは間違っている
、とまで示唆しているように
も読める。

ヴァーグナー問題への考
え方はある程度知っていた
つもりだったが、本書をあ
らためて通して読んでみる
と、イメージしていた以上に
適切・穏当なスタンスだと
言える。芸術(家)と政治は
関係ないとか、作曲家と作
品は別もの、といった常套
句でクリアするわけがなく
、逆に、作品を作曲家(の
性格等)に還元するのでも
なく、概してヴァーグナー
問題は未決との含みを残し
ている。とはいえ、イスラ
エルのヴァーグナー・タ
パーへの盟友パレンボイ
ムの挑戦を支持する時、あ
るいは西東詩集オーケス
トラの活動に尽力する際
、サイドはヴァーグナーを
含む一定の音楽作品その
ものの価値とその理想主義
的な力に軍配を上げている

家たちとの違いをあきら
かにして「序文」ダニエル
・パレンボイム。
本書収録の評論群では
まさに「小さな細部が精
密に調和する」議論が展
開され、そこに「大きな
視野が生まれる」のを目
の当たりにすることができる
。おりおり新聞や雑誌に
寄稿された時評でありな
がら、これら44篇が
いづれもそれを越えた普
通性をそなえているので
ある。評論で音楽がより
豊かになるということを
実感できるだろう。

巻末の「補遺」パッハ
/ベートーヴェン」は、未
完のまま断念された本の
起草文。音楽がサイドの
もうひとつのライフワー
クであったことが濃厚に
うかがえる、貴重な文章
である。『音楽・音楽評
論・思想』(四六①320
頁②328頁・各三三六
〇円)

学問や文化に関するその
姿勢は、彼自身が他の著
作でも自認しているよ
うに、ある意味、「保守
的」な性格のものだ
ったことだろう。アド
ルノのシュトラウス
酷評に彼が従えない理
由のひとつは、シュ
トラウス作品が実際
、現在の古典(定番)
として聴かれ続けて
きたという事実性、
その「伝統」の尊
重にある、とい
えそうだ。

エッセイストとピアノ
ニストを比較してい
る箇所などは、思想
史と演奏を比較した
丸山眞男を思わせる
。丸山もある程度
ピアノを弾いたし、
文化に関する「保
守」をある意味
自認していた。フル
トヴェングラーの
ライヴは聴けなかつ
たが、その音楽性
を愛好していた。音
楽の域を超えて、「日
本政治思想史研究」
の本店営業を圧迫す
る(と傍からは見え
る)ほど打ち込んだ
点でも、サイドに似
ているかもしれない
。ただし、世代的に
も、戦後の学生運動
での糾弾を受けた
圧迫、戦後の学生運
動での糾弾などの点
でも、サイドの先達
アドルノのほうに似
ている面もある(現
代音楽批評は別と
して)。

本書には、さまざまな
音楽祭の特徴や魅力
(そしてむろん欠点)も
紹介されており、な
かには日本ではな
かなか知られていな
いようなマイナーな
音楽祭もあるが、誤
注で丁寧に補足説
明がなされているの
で、ある種のガイ
ドのように読むこ
ともできよう。サン
タフェなど一度は行
つてみたいと思わ
れた。ただし、メ
トロポリタン歌劇
場の「字幕」など、
現在の情報へのア
ップ・デートが必
要な場合もあり
そう。

さて、そのサイドは
一体、自らの葬儀の
BGMに何を望んだ
のだろうか、『ヨハ
ン受難曲』ではな
い。丸山眞男は天
満敦子の『シヤ
コンヌ』の演奏で
送られたのだが、
(おきなみ・かず
ひで 倫理学)
* 次面にエドワ
ード・W・サイ
ドの既刊書をご
紹介しています
▽ご送付先の変
更の際は、お名
前・新住所・旧
住所と、お届け
しました本紙
の帯封コード
をお知らせさ
さい

「本書『余りの風』は、十数年前に刊行した『書かれた手』とおなじく、さまざまな媒体に発表された批評的な散文をまとめたものだが、両者を貫く細い自問の線の質は変わっていない。文芸時評のような顔はしているけれど、分類を拒み、既成の枠からはみ出そうともがいてる書法にたいに、あつてない、ないけれどあるはずの盲点をこそ言葉のうちに探ろうとするほかに夢の痕跡が、すでに見て取れる。(あとがきより)」

小島信夫、吉田一穂、山田稔、藤枝静男、古井由吉、田村隆一、竹西寛子、須賀敦子、小山清、植草甚一、佐伯彰一、高田博厚、藤村と透谷……さらに、ジャック・レダ、フィリップ・ソレルス、ゼーバルト、パロン・シユペルヴィエ、そして恩師平岡篤頼に捧げられた、全二十三篇。数々の文学賞を受けて来た堀江敏

文学の先達を読む エッセ・クリティック

堀江敏幸
《余りの風》



幸が、自らを育み、力を与えた書き手を読み込む。作家ならではの触感と、作品の深みに入って行く理路によって、読者はそれぞれの書き手の大切な部分に気がかされる。文学の先達、多くは「ええなかつた人たち」に向けられたエッセ・クリティック。

「余りの風を浴びながら、私はこれからも読み、書きつづけるほかないだろう——風音の裏側にかすかな「こだま」を聴き取ることで、その一瞬の空白に向かつて。」

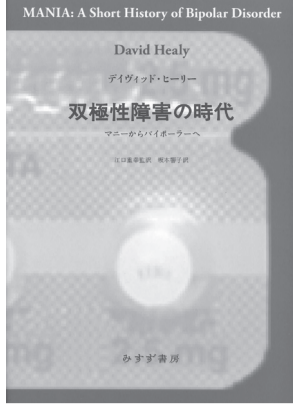
近年最良の文芸評論集と言っても、過言ではない。「文学」(四六判・320頁・二七三〇円)

「双極性」バブルの本質

デイヴィッド・ヒーリー
江口重幸監訳 坂本響子訳

双極性障害はかつて躁うつ病と呼ばれ、その概念のルーツは激しい症状で知られていたマニ(躁病)に遡るが、昨今はイメージをがらりと変えて身近な病気になりつつあるという。本書は精神医療と治療薬の領域における、双極性障害の「バブル」ともいえるべき新たな状況に注目する。そこから、精神医学と精神薬理産業が一体となって深めて

いる構造的な問題や理論上の錯誤が浮彫になってゆく。しかし著者が何よりも徹底的に描きだしているのは、「科学的」たらんとする現代の精神医学が、過去の学問的蓄積を軽々に排すること、むしろ科学本来の機能を転倒させている有様だろう。同じ倒錯が、精神医学史上に何度か危うい流行を生んできた。気分障害の診断枠が薬に合



『抗うつ薬の功罪』田島治監修 谷垣暁美訳 [5刷] 薬の副作用が黙殺される精神医療

「読み始めて、息をのむ。面白い。間違いない、ワクワクするほど面白い本である。問題は、この痛烈な面白さをどう伝えたいのかということだろう。」

「不快な本である。著者は〈ヨーロッパ最高の知性〉というところで、博學卓識、毎日二時間半の睡眠で……だとす

年末年始に、三倍はお得な大入り袋

富山佳夫 《文学の福袋(漱石入り)》

「葉蘭をそよがせよ」——この題名に掲げられた『葉蘭』とはいったいどのような植物だったのか? 『眺めのいい部屋』で主人公ルーシー・ハニーチャーチが携えていた旅行案内書とは? CIAはアニメ『動物農場』にいかに関与したのか? 本書に登場するのはジョン・ラスキン、ウィリアム・モリス、E. パーソンズ、オスカー・ワイルド、E. M. フォースター、ジョージ・オーウェルほか。ヴィクトリア朝から二十世紀なかばまで——と

今では、一九四〇年春の虐殺がソ連の犯行だったと誰でも知っている。しかしこの本が出た一九六〇年代初頭にはソ連は依然としてナチ・ドイツがやったことだと主張し、英米も事実を知りながら、ソ連の隠蔽に加担していた。

『文化と帝国主義』大橋洋一訳 全二巻(①五一四五円②四八三〇円) 『故国喪失』大橋洋一訳 全二巻(①四七二五円②四六六〇円) 『ハレスチナ問題』杉田英明訳(四七二五円) 『遠い場所の記憶』中野真紀子訳(四五一五円) 『オスロからイラクへ——戦争とプロパガンダ』中野真紀子訳(四七二五円) 『音楽のエラロレーション』大橋洋一訳(二七三〇円)

『消えた将校たち』カチンの森虐殺事件」

「『ヒーリー精神科治療薬ガイド』田島治・江口重幸監訳 冬樹純子訳 薬の効能、副作用、慎重な投薬・減薬の方法等をユーザー本位で徹底解説。原著が5版を重ねている無二の手引書。(四七二五円)

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

傍証だけでソ連の犯行を実証

J.K. ザウオドニ
中野五郎・朝倉和子訳 根岸隆夫解説

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

人生と運命

グロスマン スターリングラード攻防戦を舞台に、権力のメカニズムと抗う人間の運命を描く叙詩的長篇。齋藤一訳 四五一五円

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

人生と運命

グロスマン 独裁体制と密告社会を内部から赤裸にしたソ連時代の禁書が甦る。ロシア文学で初の日本翻訳文化賞受賞。四七二五円

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

人生と運命

グロスマン 独裁体制と密告社会を内部から赤裸にしたソ連時代の禁書が甦る。ロシア文学で初の日本翻訳文化賞受賞。四七二五円

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

人生と運命

グロスマン 独裁体制と密告社会を内部から赤裸にしたソ連時代の禁書が甦る。ロシア文学で初の日本翻訳文化賞受賞。四七二五円

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

人生と運命

グロスマン 独裁体制と密告社会を内部から赤裸にしたソ連時代の禁書が甦る。ロシア文学で初の日本翻訳文化賞受賞。四七二五円

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

人生と運命

グロスマン 独裁体制と密告社会を内部から赤裸にしたソ連時代の禁書が甦る。ロシア文学で初の日本翻訳文化賞受賞。四七二五円

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

人生と運命

グロスマン 独裁体制と密告社会を内部から赤裸にしたソ連時代の禁書が甦る。ロシア文学で初の日本翻訳文化賞受賞。四七二五円

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

人生と運命

グロスマン 独裁体制と密告社会を内部から赤裸にしたソ連時代の禁書が甦る。ロシア文学で初の日本翻訳文化賞受賞。四七二五円

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

人生と運命

グロスマン 独裁体制と密告社会を内部から赤裸にしたソ連時代の禁書が甦る。ロシア文学で初の日本翻訳文化賞受賞。四七二五円

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

人生と運命

グロスマン 独裁体制と密告社会を内部から赤裸にしたソ連時代の禁書が甦る。ロシア文学で初の日本翻訳文化賞受賞。四七二五円

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

人生と運命

グロスマン 独裁体制と密告社会を内部から赤裸にしたソ連時代の禁書が甦る。ロシア文学で初の日本翻訳文化賞受賞。四七二五円

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

人生と運命

グロスマン 独裁体制と密告社会を内部から赤裸にしたソ連時代の禁書が甦る。ロシア文学で初の日本翻訳文化賞受賞。四七二五円

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

人生と運命

グロスマン 独裁体制と密告社会を内部から赤裸にしたソ連時代の禁書が甦る。ロシア文学で初の日本翻訳文化賞受賞。四七二五円

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

人生と運命

グロスマン 独裁体制と密告社会を内部から赤裸にしたソ連時代の禁書が甦る。ロシア文学で初の日本翻訳文化賞受賞。四七二五円

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

人生と運命

グロスマン 独裁体制と密告社会を内部から赤裸にしたソ連時代の禁書が甦る。ロシア文学で初の日本翻訳文化賞受賞。四七二五円

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括として書か

人生と運命

グロスマン 独裁体制と密告社会を内部から赤裸にしたソ連時代の禁書が甦る。ロシア文学で初の日本翻訳文化賞受賞。四七二五円

「『カチンの森』が、欧米でカチン関係の本が数多く出たあと、総括

書評コラム

iPS細胞時代だからこそ 生殖技術を考えよう

本書の副題には、「不妊治療」と「再生医療」という言葉が並んでいる。一見無関係のようだけれど、女性の身体から採取された卵子は、九〇年代中盤からの十年余りの間、クローン胚の作製やES細胞の樹立といった再生医療の研究活動に使われてきた。奇しくも、今年のノーベル賞はiPS細胞(体細胞から樹立し、様々な細胞に分化しうる幹細胞)で、同時受賞が噂されてきた、クローン羊をつくった科学者が受賞を逃した。そのため、卵子や受精卵を使う再生医療研究は終わったかのよう

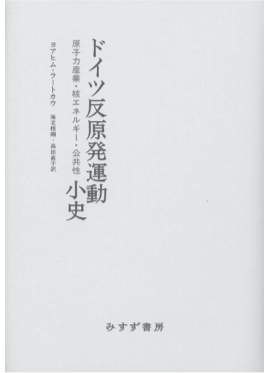
脱原発——ドイツ四〇年の歩みを考察。なぜ、ドイツの反原発運動は成功したのか。市民の抗議と情報の流れが、いかに原子力のリスクに反応し、公共性の欠如を克服したのかを検証する。

ラートカウによる原子力関連の論考四篇と、記者によるインタビューを収録した。著者は、現在ドイツを代表する環境史家であるが、その出発点は一九七〇年代初頭に着手したドイツの原子力産業と原子力論争の歴史研究にある。それゆえ彼はフクシマ事故後、この分野の第一人者として、また自然環境とエコロジを論じる環境史の大家として、ドイツ内外のメディアから好んで意見を求められる存在である。

本書では、ドイツの原子力の歴史が、産業、エネルギー政策、反原発運動、公共性といった観点から論じられる。ここから生産的な議論や未来につながる思想が生まれることを願う。

これからの議論のために

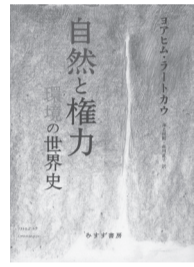
ヨアヒム・ラートカウ
《ドイツ反原発運動小史》
原子力産業・核エネルギー・公共性
海老根剛・森田直子訳



▼著者既刊
『自然と権力——環境の世界史』海老根剛・森田直子 環境をめぐって作動する「権力」の歴史の様態を描出し、政策への示唆にも満ちた傑作。史料批判と旅の経験の融合から生まれた新たな環境史の壮大な試み。ドイツ屈指の環境史家の主著。(七五六〇円)

▼目次「あれから一年、フクシマを考える」「ドイツ反原発運動小史」「核エネルギーの歴史への問い」「ドイツ原子力産業の興隆と危機」「原子力・運動・歴史家」

「環境・思想・歴史」(四六判・二一六頁・二五二〇円)



▼原子力 核をめぐって——既刊より
朝永振一郎『プロメテウスの火』(本面下に広告)／山本義隆『福島原発事故をめぐって——いくつか学び、考えたこと』(一〇五〇円)／大石又七『ピキニ事件の真実——いのちの岐路で』(二七三〇円)／メドヴェージェフ『チエルノブイリの遺産』吉本晋一郎訳(六〇九〇円)

武藤香織
柘植あづみ
《生殖技術》
を読む



に報道されたが、iPS細胞の研究には比較のためにES細胞が必要であり、これからの不妊治療と再生医療はつながり続ける。

著者の柘植あづみさんは、医療人類学を志し、女性の身体をとりまく医療の現場で様々なフィールドワークを行ってきた。本書は、著者が取り組んできた、不妊治療と再生医療の接点に開く研究成果を、様々な角度から平易な言葉で論じた論文集である。不妊を克服すべきという規範から生

現場で様々なフィールドワークを行ってきた。本書は、著者が取り組んできた、不妊治療と再生医療の接点に開く研究成果を、様々な角度から平易な言葉で論じた論文集である。不妊を克服すべきという規範から生

の進展と欲望の産生の連鎖を解く本書は、iPS細胞ブームの今だからこそ、読まれるべき存在だ。

とはいえ、本書には、不妊治療や卵子提供をめぐる様々な選択をした人への公正で温かい眼差しが貫か

れている。読み手によって、その印象を与えるのは、著者の研究姿勢によるものだろう。初学者にもわかりやすいように、巻末には専門用語の解説が出ている。

著者は、現在、米国に滞在して研究中である。その間隙を狙うように、日本では「新型」出生前検査の臨床研究に関する報道や、マウスのiPS細胞から分化させた精子・卵子でマウス個体が誕生したというニュースが飛び交った。これは著者の宿題としか思えない事象だ。ともに議論できる日を待ち望んでいる。

(むすび・かおり 社会学 東京大学医科学研究所)
▼柘植あづみ『生殖技術』(本紙次面下に広告)

幻の書がよみがえる

ベルトルト・リットマン編
原田光子編訳 ヨハネス・ブラームス 友情の書簡



ブラームス

シューマン夫妻の長女が保管していたクララとブラームスの書簡がリットマンの手に託され、公開されたのは一九二七年のこと。21歳のブラームスが作曲家になる希望を抱いてデュッセルドルフのシューマン家を訪れた一八五三年からクララの死の直前の九六年五月までに交わされた800通あまりを収めた原書の中から、207通を精選したのが本書である。

性、昭和16年に『真実なる女性』クララ・シューマンの性、リスト、ワグナーの新ドイツ楽派が台頭する当時の音楽界の様子、ブラームスの楽曲の生成過程にクララが与えた影響、音楽的活動と個人の生活：高名な作曲家の未亡人であるスター・ピアノリストと一七歳年下の作曲家という、友情を育むには不利な条件を乗り越えて四〇年にわたって



クララ

訳者は当時30代の若い女性

上梓した原田光子。ドイツ語の資料を読み込み、ロマンチックな粉飾を交えることなく美しい日本語で書かれたこの評伝は70年以上にわたる読み継がれてきたが、原資料の一つであるこの書簡集は、早世した訳者が翻訳原稿を完成させて世を去ったのちに、戦後一度は本にならなかったが、長らく手に入らなくなったもので、待望の復刻となる。

『西洋音楽史』(二月上旬刊) (A5296頁・予価四七二五円)



原田光子

知られざる奇才、初めての評伝

田中純

《冥府の建築家》ジルベール・クラヴェル伝



「わたしがいつかもはやこの世にいなくなったとき、わたしの霊は自分が一生のあいだ崇拜し、探し求めて、そのために自分のすべての信仰を捧げてきたものの中に入り込んでゆく。朝はわたしとともに夕暮れとなり、暗闇は新しい一日の再生となるだろう」(草稿「変容」より)

ジルベール・クラヴェル(一八八三—一九二七)。幼少期の結核が元で宿痾をかかえたジルベールは、イタリア未来派の演劇活動、『自殺協会』と題された幻想小説、そして南イタリアはボジターノの岬に建造した洞窟住居と、セイレーンの歌声が響く神話の古層を求めて四四年の短い生涯を駆けぬけた。

「エジプト旅行によって古典古代よりもさらに古い古代に触れ、パレオ・リュスや未来派の経験を経て芸術の前衛を知ったクラヴェルは、塔を

みすず書房新刊

(2012・1・12) 2
東京・文京本郷5
区三三三(四〇三)
(価格は税込です)

《始まりの本》

素足の心理療法
シュニット 決断なき政治の根源にあるロマ主義を徹底検証。全体主義を考える必須の書。大久保和郎訳 野口雅弘解説 三三六〇円

《始まりの本》

老化的進化論 小宮メトセラがロイス、老化とは何か。老化の諸現象を生む進化の論理を探り、寿命の新たな意味を問う。第一人者の報告 熊井ひろ美訳 三二五〇円

《始まりの本》

1968年 反乱のグローバリズム
フライ なぜ学生運動がこの時期に世界中で起ったか。米仏独英日、日本、東欧の出来事を詳細に追った。下村由一訳 三七八〇円

《始まりの本》

権力の病理 誰が行行使し
誰が苦しむのか 医療・人権・貧困
フアーマー 貧困国での無償医療を著名な医師による構造的暴力の見事な分析と処方。セシ序文。豊田英子訳 山本太郎解説 五〇四〇円

《大人の本棚》

時の余白に
芥川喜博 世相に思っている美を手がかりに、現代社会を照射した人気コラムの書籍化。震災後半年を含む五年余の軌跡 二二二五円

《大人の本棚》

建築を考える
ツムトア 世界中のクリエイターの尊敬を集める巨匠が、創造にこめられた想いを綴った名著。待望の邦訳。鈴木仁子訳 三三六〇円

《大人の本棚》

小石、地球の来歴を語る
ザラシーウィッチ 小石の中の痕跡を科学的に読み解き、地球史をエレガントに描く地学読者の珠玉作。江口あとか訳 三二五〇円

《始まりの本》

チヨコレートの帝国
ブレナー 米国の二大製菓会社ハースとマーズ。その歴史と内幕に迫り、菓子から見える二十世紀を活写。笹玲子訳 三九九〇円

《大人の本棚》

動物の環境と内的世界
ユラスキエル 生物進化の一元論から環境世界への多様な適応機能へ。生物学に認識論的基礎を与えた名著。前野佳彦訳 六三〇〇円

《大人の本棚》

安楽椅子の釣り師
露伴、野田、開高の名作ほか素石や雨村の随筆。井田知夫、河合雅雄のエッセイなど釣りの妙味を伝える13篇。湯川豊編 二七三〇円

《始まりの本》

チースとつじ虫 16世紀の粉挽屋ギンズブルグ 埋もれた史料を駆使し、民衆文化の深層にスリリングに迫る現代歴史学の名著。杉山光信訳 上村勇解説 三九九〇円

少年俳優とエリザベス朝の大衆文化
楠明子 シェイクスピアの劇では女性の出番はなく、少年たちが女優をこなした。彼らはクレオパトラをどう演じたのか? 三三六〇円

始まりの本

からはじまる
100冊

始原へ立ち帰って、何度でも読み直したい現代の古典。シリーズ『始まりの本』から関連書をたどって、100冊余を紹介します。「始まりの本」概要 四六変型判ソフト上製200-400頁・二六二五-三九九〇円 続刊]

一生ものの朝永物理学

朝永振一郎
江沢洋編

物理学への道程

「光子の裁判」鏡の中の物理学」などの著名な作品から、知る人ぞ知る佳品「思い出ばなし」「量子力学の曙」まで、朝永振一郎の必読作を一冊で出会える新編集本。話題は原子論の黎明にはじまり、よりミクロの次元へと沈潜し、くりこみ理論の着想にまで及ぶ。教育論(「数学がわかる」というのはどういうことであるか)他)も含め、著者の遺産が立体的に浮かび上がるように編纂されている。

俊才であった朝永も、山の威容に圧倒されながら一足一進進む登山者のごとくに自らの道程を歩んだことを、真率な言葉で語っている。「大それた学問などやろうと思つたのは結局やっぱりまちがいで、」

「純粋数学の成立は実はきわめて稀有な歴史的個性的な事件であり、深き精神的意義をもつものではないか。数学と自然科学と形而上学の三位一体性から(ヨーロッパ精神)形成の系譜をたどり、精神

「物理」(十二月二十日刊) (四六変型判384頁・三三三〇円) 朝永振一郎『量子力学』I・II (第二版) (一三六七五円) (二〇〇〇円) 同『角運動量とスピンの亀淵』原・小寺編(四四一〇円) 同『新版 スピンはめぐる』江沢洋・注(四八三〇円) 朝永振一郎編『物理学読本』(第二版) (二六二五円)

病院が社会の縮図だった時代

E・H・アッカークネヒト
館野之勇訳 引田隆也解説

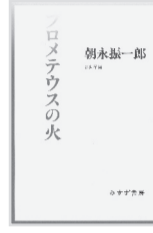
革命が生んだ特異な医学。それを本書は「病院医学」と名づけた。「書齋医学」や「ベッドサイド医学」また今日の「研究室医学」とも異なる全く独特の型の医学である。中世以来の病院施設は、貧困者や犯罪者や狂人も含む収容施設だった。政治革命は新しい病院と教育制度をつくり、病院を足場に医学革命が、首都パリにおこった。聴診器の発明や精神医学・小児科など専門科の誕生は現代医学の出発点を印す。が、病院医学は行き詰まり、わずかに五十五年後のパストゥールらに始まる研究室医学に変わらされるのだ。

傑出した医学史家アッカークネヒトの筆致はまるで医療の社会史のようだ。しかし「単なる」医学

「政治思想の観点に立つて」パリ、病院医学の誕生」をフーコー「臨床医学の誕生」と重ね読む、刺戟的な読解を案内する新解説付。「思想・医学史」(十二月二十日刊) (四六変型判・384頁・三三三〇円) 山本義隆『一六世紀文化革命』全二巻各三三六〇円 同『魔法術から科学へ』前田達郎訳(三二五〇円) 中井久夫『西歐精神医学背景史』(三三三〇円) ウィルソン『フィンランド賦へ』全二巻 岡本正明訳(各四七二五円)

朝永振一郎『プロメテウスの火』

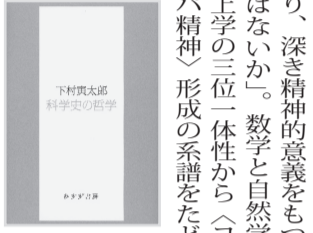
原子核物理学の傑出したリーダーの一人であり、またノーベル賞受賞者として戦後の基礎科学研究振興のキーマンでもあった立場から、朝永が科学の「原罪」という認識を説いた8篇、および原子力



開発史の貴重な資料でもある座談3篇を、特に3・11後に読み返すねらいで精選。(三二五〇円) 補巻1(各一五七五〇-一八九〇〇円) 補巻2(各一五七五〇-一八九〇〇円) 山本義隆『福島原発事故をめぐって』(一〇五〇円) 『パイス』ニールス・ボーアの時代』全二巻 西尾成子他訳(一六九三〇円) ②七九八〇円

下村寅太郎『科学史の哲学』

加藤尚武解説

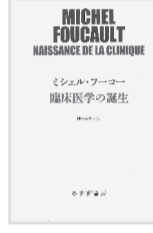


「純粋数学の成立は実はきわめて稀有な歴史的個性的な事件であり、深き精神的意義をもつものではないか。数学と自然科学と形而上学の三位一体性から(ヨーロッパ精神)形成の系譜をたどり、精神

ミシェル・フーコー『臨床医学の誕生』

神谷美恵子訳 斎藤環解説

十八世紀末に端を発する現代医学は、病を知覚する空間とそれを記述する言語 および身体解剖から始まった。人間が自らの個体を知らずして誕生したか。医学の認識



「臨床医学の誕生」をフーコー「臨床医学の誕生」と重ね読む、刺戟的な読解を案内する新解説付。「思想・医学史」(十二月二十日刊) (四六変型判・384頁・三三三〇円) 山本義隆『一六世紀文化革命』全二巻各三三六〇円 同『魔法術から科学へ』前田達郎訳(三二五〇円) 中井久夫『西歐精神医学背景史』(三三三〇円) ウィルソン『フィンランド賦へ』全二巻 岡本正明訳(各四七二五円)

スーザン・ソントグ『隠喩としての病』

富山太佳夫訳

結核、癌、エイズ……西洋文化が「病い」をとらえるさい、いかなる表象が動員され、いかなる権力が作用してきたのか。みずから癌体験をふまえて、病いにまといつく言葉の暴力を浮き彫りに



「隠喩としての病い」(三三六〇円) ソントグ『他者の苦痛のまなざし』北條文緒訳(二二〇〇円) 同『書くこと、ロラン・バルトについて』富山太佳夫訳(三三三〇円) 同『土星の微しの下』富山太佳夫訳(三四六五円) クライマン他『他者の苦しみの責任』坂川雅子訳 池澤夏樹解説(三三三〇円)

テオドール・アドルノ『哲学のアクチュアリティ』

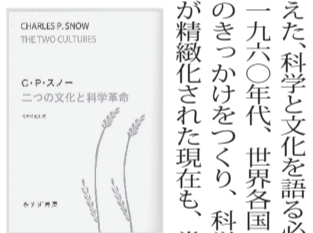
「だからこそ、哲学はたえず新たに始めなければなりません」初期アドルノ思想の根幹をなす、二十世紀思想を知るための二講演「哲学のアクチュアリティ」「自然史の理念」を軸に、初めて



「自然史の理念」を軸に、初めて

C.P.スノー『二つの文化と科学革命』

松井巻之助訳 S・コリー二解説



自然科学と人文科学、両研究者間の乖離と無理解による危機を訴えた、科学と文化を語る必須文献。一九六〇年代、世界各国で大論争のきっかけをつくり、科学社会学が精緻化された現在も、常にル

G.S.ステント『進歩の終焉』

渡辺格他訳 木田元解説

科学や芸術の進歩は永遠に続くのか。分子生物学の興亡や、ポップ・アート、現代音楽を分析しながら、その終焉を宣言する。成長を前提としない社会のあり方が模索される現在を一九六〇年代に予



「進歩の終焉」(二九四〇円) グレイ『わらの犬』地球に君臨する人間 池央歌訳(三七八〇円) ジャコブ『ハエ、マウス、ヒト』原章二訳(二七三〇円) ベルギー『ナノ・ハイブ狂騒』全二巻 五島綾子監訳・熊井ひろ美訳(一三九九〇円) ②三七八〇円) アーサー『テクノロジーとインベーション』有賀裕二監訳・日暮雅通訳(二九四〇円)

カルロ・ギンズブルグ『チーズとじ虫』

杉山光信訳 上村忠男解説

「すべてはカオスである。すなわち土、空気、水、火のすべてが渾然一体となったものである……」そしてチーズの塊からじ虫が湧き出るように天使たちが出現した。かく語るメノッキオとは何



「チーズとじ虫」(二九四〇円) 同『系と痕跡』上村忠男訳(三六七五円) セルト『ルーダンの憑依』矢橋透訳(六八二五円) デーヴィス『贈与の文化史』宮下志朗訳(三九九〇円)

みすず書房新刊

2012・1・12 3
東京文京本郷5
区三軒三丁目三
(価格は税込です)

そこに僕は居合わせた

語り伝える、ナチスドイツ下の記憶。パウゼアング。全体主義の狂気に「普通の」人ひとりのみこまれてゆくさまを、少年少女の目を通して描く。高田ゆみ子訳 二六二五円

長い道

宮崎かつゑ 十歳でハンセン病療養所・長島愛生園。瑞々しい言葉で綴る道程。辰日芳子氏との対談付。好評3刷。二五二〇円

私の西洋音楽巡礼

徐京植 アウシュヴィッツの後の音楽とは。マイラー、尹伊桑など音楽という鏡に映して自分自身と時代を省みる最新作。二九四〇円

心理療法/カウンセリング

岡野憲一郎 心理面接者が抱く迷いや疑念にユニークな視点でもうひとつの思考回路を示す。経験知識のハンドブック。三三三〇円

ヘテロトピア通信

上村寅男 サイドら境界知識人の立つ「異他なる反場所」から、言論状況への批判的介入をめざして。思想史家の実践。三九九〇円

ライファーズ 罪に向きあう

坂上香ひとら 自分の牢獄から自由になれるか。米西部の更生団体と、終身刑受刑者の出会いと回復のドキュメント。二七三〇円

リアさんと、どんなひと?

リアさんと会うというお方! こんなくだらぬ本を書いて会ったノンセンズの桂冠詩人。ペーソスに満ちた詩集。新巻一編 三三三〇円

境界例研究の50年

笠原嘉隆 境界例・境界パノラマ(リチャード・ド・トリス)の概念の変遷と研究の昨今。適切な治療距離を重視した臨床経験が生んだ8篇。三七八〇円

サラエボで、ゴドーを待ちながら

エッセイ集2 写真・演劇文学 ソントグ 戦下での「ゴドー」演出にマイブロンソフからフロックイ追悼まで。眩しいほどのエッセイ集。富山太佳夫訳 三九九〇円

幻滅論

北山修 古事記や浮世絵の母子像の分析を通して、人の「つながり」と幻滅のあり方を考察。「日本」という抵抗」を増補。二七三〇円

シモーヌ・ヴェイユ選集

中期論集・労働・革命 労働組合関連の未邦訳記事、書評、長文論考「展望」そして精緻な工場勤務の記録「工場日記」など全12篇。富原真司訳 五〇四〇円

最悪のシナリオ

巨大リスクにどこまで備えるのか。サンステイーン 不可逆的大災害に対して予防原則と費用便益分析はどこまで有効かを論じる。田沢恭子訳 齊藤誠解説 三九九〇円

ホロコーストの音楽

ゲッターと収容所の生。ギルバート 極限下の音楽とは。歌、オーケストラ、演奏。人間社会の深部が発掘資料で甦る。譜面34点付。二階宗人訳 四七二五円

スターリンのジェノサイド

ナイマーク カチンの虐殺、ウクライナ飢饉。大粛清他、数百万を超える大量殺人はジェノサイドではないか。根岸隆夫訳 二六二五円

生殖技術

柘植あづみ 生殖技術は社会をどう変えるか。不妊治療の範囲をどこに越えて発展する生殖技術の問題と解決を照し出す。三三三〇円

「始まりの本」隠喩としての病い/エイズとその隠喩

ソントグ みずからの癌体験をふまえて、病いをとりまく言葉の暴力を浮き彫りに。透徹した文化批評。富山太佳夫訳 三三三〇円

ルネサンスの秋

バウスマ ルネサンスの最盛期は衰退期でもあった。国家・宗教・学問・言語など分野を横断して描く画作。澤井繁男訳 六三〇〇円

現代精神医学のゆくえ

ガイミイ 生物心理社会折衷主義の弊害を超え、あるべき医学の知へ。「現代精神医学原論」を継ぐ論議の書。山岸洋他訳 六八二五円

目立たぬものの精神病理

プランケンブルク 哲学に基礎を置いた精神医学と精神療法の大きな遺産。代表的論文10編収録。木村敏・生田孝訳 五〇四〇円

小林且典作品集

ひそやかな眼差し 自ら創造したプロゾンを自作レンズで写真に収める彫刻家の作品世界。静岡市美術館「ひそやかな眼差し」展公式カタログ。三五七〇円

10月 解離する生命

野間俊一 解離性障害、境界例、摂食障害など(傷つき体験)の諸相から何が見えてくるか。気鋭の精神科医の深い考察。三五七〇円

アメリカの心の歌

expanded edition 長田弘 長年にわたる愛聴してきた詩人が、カントリー音楽を「読み」、アメリカの真姿を「見る」素晴らしいエッセイ。二七三〇円

なぜいままで読まれるのか

中井久夫 《サリヴァン、アメリカの精神科医》

一九七六年の『現代精神医学の概念』の邦訳刊行以来、サリヴァンの著作の多くは版を重ねてきた。『精神医学の臨床研究』『精神医学の面接』『精神医学は対人関係論である』『分裂病は人間の過程である』『サリヴァンの精神科セミナー』。フロイト、ユング一辺倒の日本で、なぜここまで読まれるのか。その理由の一つに、全訳訳に關与した中井久夫の存在がある。中井の著作が読まれるのに応じて、サリヴァンも読まれた。患者への接し方や精神医学をめぐる考え方に二人に共通する点も多い。

泰斗による不朽の現代社会論

デイヴィッド・リースマン 加藤秀俊訳

《孤独な群衆 全2巻》

D・リースマン(一九〇九—二〇〇二)は長くハーバード大学で社会科学教授をつとめた人物。知の第一線にあつて、大衆文化や働く人々の生活・労働環境など、幅広い視野と知見を持つ社会学の泰斗が、「伝統志向型」「内部志向型」「他人志向型」の三つのキーワードで、個人と社会がどのように切り結ぶか論じる。本国では一九五〇年の初版以来、日本では一九六四年の邦訳刊行以来、いづれも版を重ね続ける古典的名著である。『始まりの本』版の刊行にあたり、改訳をほどこすとともに、リ

ノーマ・フィールド 『天皇の逝く国で』

大島かおり訳

昭和末期に、体制順心といふ常識に抗った日本人、沖繩国体で日の丸を焼いた知花昌一と、殉職自衛官の夫の靖国神社参りに反対した中谷康子、天皇の戦争責任を明言して狙撃された長崎市長の本

霜山徳爾 『素足の心理療法』

妙木浩之解説

患者があつて理論が生まれる。既成の心理療法の主義・技法にとられず、「素足」であるということ。それが心理療法家・霜山徳爾の流儀である。其業性・畏敬性などエッセンスの詰まった一書に、これまで単行本未収だった論考一篇を付す。(三二五〇円) フランクル『死と愛』霜山徳爾(二七三〇円) ポス『東洋の英知と西欧の心理療法』霜山・大野訳(四四一〇円) 西丸四方『精神医学の古典を読む』(三三六〇円) 笠原嘉臨床論集『うつ病臨床のエッセンス』『外来精神医学という方法』『再び「青年期」について』『境界研究の50年』(各三七八〇円)

石原吉郎 『望郷と海』

岡真理解説

敗戦とともに連軍に抑留された八年間のシベリア収容所体験をへてきた著者は、生き残った者として、戦後日本社会の変貌に戸惑いながら自らの体験を言語化していった。(告発)しない生き方とは、

ジャック・アタリ 『ノイズ』

金塚貞文訳 陣野俊史解説

「世界は読み取られるものではない、聴き取られるものなのだ。」生きた世界からは音が聞こえる。労働の槌音、人間のざわめき、自然の物音、人間と音・音楽との関係こそが、社会を告知し未来を予

原武史 『可視化された帝国』

『民都』大阪対「帝都」東京

も『大正天皇』も、この十年に及ぶ近代天皇制の実証的研究から生まれた。全国をまわり生身の身体をさらした三人の天皇の「視覚的支配」。その限界を克服し「想像

グスタフ・ヤノホ 『カフカとの対話』

吉田仙太郎訳 三谷研爾解説

17歳の多感な年頃にカフカと出会った著者。以後ふたりの間では文学・音楽・美術、そして社会や歴史や人間をめぐる極私的会話が

カール・シュミット 『政治的ロマン主義』

大久保和郎訳 野口雅弘解説

はたしてナチスへの道筋か、辛辣な政治批判か。ワイマール共和制の「決断なき政治」と、その根源にあるロマン主義を痛烈に批判

ハンナ・アレント 『アウグスティヌスの愛の概念』

千葉真訳

一九二〇年代ドイツで、ヤスパーズの指導とハイデガーの影響の下に書かれ刊行された博士論文。共同性の存在論を問うアレント

藤田省三 『天皇制国家の支配原理』

宮村治雄解説

戦後日本を代表する思想史家のデビュー作。明治の近代国家成立の経緯の中で、ムラ社会と国家を繋ぐ装置としての天皇制を思惟内

E・H・カー 『ロシア革命の考察』

南塚信吾訳

社会における意識性の発展という観点から、知識人の革命としてのロシア革命を論じる。ソヴェト・ロシア史の古典。『三月刊』(予備

みすず書房新刊

(2012・1・12) 4 (価格は税込です)

判決

ジュネ 遺作『恐るる唐』のプロトタイプにして、S・マルメ「インチュール」に比すべき思考実験の書。宇野邦一訳 三九九〇円

ヴェーレルの政治学

スコット ジェンダー歴史学者が別居イストラム・スカール禁止法とフランス共和主義の破綻。排除政治の行方。李孝徳訳 三六七五円

カフカとの対話 手記と追想

ヤノホ 青年はカフカと出会い、語り合った。人間カフカの思想と姿を瑞々しく伝える。吉田仙太郎訳 三谷研爾解説 三九九〇円

落語の国の精神分析

藤山直樹 「落語は民話」の視点から人物と病理、物語の力を分析する目から鱗の落語評論。立川談春師匠との対談収録。二七三〇円

不平等について

ミロノヴィッチ 歴史上最も富者は誰か。世界の所得格差の実態は、不平等計測の専門家がかたる基礎知識。村上彩訳 三二五〇円

書物復権 2012

第16回を迎えた『書物復権』8社共同復刊におきまして、皆様からのリクエストにより、次の書籍を復刊いたしました。

憲法論

シュミット 近代の「市民的・法治的」憲法の発展を、思想的・社会的に鋭く分析した古典。『復刊』阿部・村上訳 六八二五円

心の概念

ライル 日常言語学派の哲学的手法確立の宣言の書。心身三元論の伝統を根底的に批判する。『復刊』坂本・井上・服部訳 五九八五円

実体概念と関数概念

認識批判の基本的諸問題の研究 カツシラー 数学的・自然科学的思惟構造の形成を、「実体」から「関数」への発展として把握する。『復刊』山本義隆訳 六三〇〇円

クナツ・パツツシユ

奥波一秀 歴大な史料を緻密に検証する。その先に見えてくる大指揮者の真の姿。暗い時代との関係を探る意欲作。『復刊』三二五〇円

実践感覚

ブルデュー 「慣習的行動」実践の意味を究明する。現象学と構造主義を包摂する記念碑的業績。『復刊』今村仁司訳 各三四六五円

基本図書限定復刊

「4・10月」 本年は春と秋の二回、各分野で基本文献とされ、そして専門を越えて長く読み継がれる基本書を選び復刊いたしました。

精神病理学原論

ヤスパース 著『精神医学総論』の初版クレペリンを超える、現象学と心理学から方法論。『復刊』西丸四方訳 六〇九〇円

精神医学は対人関係論である

サリヴァン 死後出版された最初の講義録。成長における各発達段階で、対人関係の重要性を説明。『復刊』中井久夫他訳 七九八〇円

自己の分析

フロイト 自己愛パーソナリティ障害の精神分析的治療理論。現代ナルシシズムの代表的著作。『復刊』水野・笠原監訳 七〇三五円

自己の治癒

フロイト 自己心理学の立場からの精神分析的治療の本質。内省と共感に基づく実践の到達点。『復刊』本城・笠原監訳 七〇三五円

自己の修復

フロイト 欲動の心理学から自己の心理学へ。断片化した心に喜びをとりもどす新しい理論。『復刊』本城・笠原監訳 七〇三五円

過程と実在

ホワイトヘッド 「過程はそれ自体で現実態である。近代哲学の基礎を乗り越える。『復刊』平林康之訳 〇六三〇〇円 〇五七〇〇円

化学熱力学

プリゴジンヌ・デフェイ 可逆変化を基礎とした古典的熱力学に対し、不可逆変化を論じた教科書。『復刊』尾屋学訳 各四七二五円

カルノー・熱機関の研究

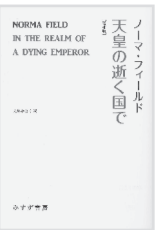
熱力学第二法則の原型となる定理を導いた論文「火の動力についての考察」。『復刊』弟による小伝他。『復刊』広重徹訳 三二五〇円

人間知性新論

ライブニッツ フィラレトとテオフィルの対話。ロクク 「人間知性論」の経緯論に對抗する合理論。『復刊』米山優訳 七七七〇円

コペルニクス 天球回転論

天動説から地動説への転換をもたらした近代の幕開けを告げた、科学史の第一級の古典。解説を付す。『復刊』高橋憲一訳 三九九〇円



ノーマ・フィールド 『天皇の逝く国で』



原武史 『可視化された帝国』



ジャック・アタリ 『ノイズ』



ハンナ・アレント 『アウグスティヌスの愛の概念』



藤田省三 『天皇制国家の支配原理』



E・H・カー 『ロシア革命の考察』

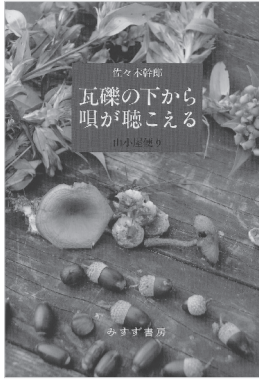
「コオロギの声に包まれて／白い満月を見た／船は丘の上で／錆びていく／もし／もし／もし／わたしです／ここにいないわたしです／水のなかで／呼んでいるのはわたしです／／ことばと消えていくのは／ことばが／わたしたちを見捨てたからだ／風が哀しみを奪ったからだ」(本書「鏡の上を走りながら」より)

「東日本大震災の以前と以後で何が変わったのか。詩歌に関して言えば、絶えず言葉が試され続けているというのだ。詩や歌を書いても、書かなくてもいい。ただ、表現

3・11以後の日常に詩と歌を問う

佐々木幹郎

《瓦礫の下から唄が聴こえる 山小屋便り》



山小屋便り

者の位置に立つ限り、言葉は試されている。わたしたちは何に試されているのか。過去から、未来からだ。現在、この国に浮かぶ膨大な死者の霊に試されている。これから生まれてくる子どもたちにも試されている。このことの実感を持つかどうか、そのことも試されている。

浅間山麓の山小屋で週末を過ごすこと三十年、自然と向きあひながら「血のつながらない新しい家族の形態」を模索してきた詩人が、東日本大震災発生で何を考え、いかに行動したか。3・11以後の日常にあつて詩と歌、表現はどのようなものであるべきか。そして「東北」はどのように語られるのか。津軽三味線奏者の二代目高橋竹山とともに被災地をめぐり、東北民謡発祥の地を訪れ、海から山を、山から海を思う。二〇一二年十二月刊の詩集『明日』(思潮社)により第二回秋原朔



舞根湾(気仙沼)にて

太郎賞を受賞した著者がつづつた詩文集。『文学』(四六判・232頁・二七三〇円)

著者既刊

『田舎の日曜日』ツリハウスという夢(二八三五円)／『雨過ぎて雲破れるところ』週末の山小屋生活(二二二〇円)／『やわらかく、壊れる』都市の滅び方について(二六二五円)／『中原中也 悲しみからはじまる』『理想の教室』(二二六五円) 月刊『みすず』には「山小屋便り」長期連載中です。

生命の起源を説明可能にする道筋

C・マラテール《生命起源論の科学哲学》 佐藤直樹訳



丸山眞男

生命とは何か、生物は無生物とどこが違うのかを考えるとき、特別な生命の力を仮定する生気論を除いても、二通りの考え方があつた。生命現象はすべて物理・化学的原理によつて説明できるというのが還元論、そうではないと考えるのが創発論である。

著者は創発のさまざまな概念を検討した上で、「実用主義的な創発」概念を提唱し、生命の起源が創発的であるかどうかを、二つの文脈において検討した。すなわち、「歴史的文脈」では生命出現の道のりは厳密にたどられず、「創発」か否かは答えられないが、「物理・化学的文脈」においては、現在の知識では生命出現は創発的である。



著者 クリストフ・マラテール

しかし、生命出現に至る一連の過程を分割し、生体物質が合成される第一段階、機能が物質が化学進化する第二段階、初期生命が出現する第三段階に分けると、各段階とも未来永劫説明不可能ということとはなく、生命の起源は創発と見なさなくてもよいという結論に至る。

本書の元をなす博士論文は、学士院奨学金賞とパリ大学総局賞文系部門をダブル受賞した。フランス科学哲学の最新線。『科学哲学』(一月下旬刊)(四六四頁・予価五五〇円)

月刊雑誌

『みすず』最近号より

平沢剛「映画の可能性としての足立正生」ワンデイ「ラヤとリンシヘー」西北ブライタン紀行／保坂和志「ランボーのぶつくさ」／「新連載」山本太郎「医師の山歩き」(十月号)。サイド「オペラ制作『ぼらの騎士』」死者の家から『フアウスト博士』／ルヴェルディ「死者たちの歌」／酒井啓子「土地を守ること、人を守る」／宮田昇「暁の死線」と地域の図書館(十一月号)。森川すいめい「自死の少ない町にて」徳島県旧海部町を歩く／飯島みどり「バービー・ヤールへの道」／辻由美「おやつ哲学」／「新連載」中村健之介「ドストエフスキー・ノート」読めば読むほど(十二月号)。連載は小沢信男、大谷卓史、外岡秀俊、野口良平、池内紀、高桑信一、佐々木幹郎、植田実、上村忠男他。(各三二五円)

『みすず』から生まれた本

月刊雑誌『みすず』の連載から、今年も何冊もの本が生まれました。

阿部恵一郎『精神医療過疎の町から』最北のクリニックでみた人・町・医療

二〇〇七年春、「精神医療過疎の町」に日本最北の精神科クリニックができた。その町に生きる人々の姿を描く、静かなエッセイ集。



阿部恵一郎『精神医療過疎の町から』

「読書アンケート」号と定期購読のご案内

『みすず』次号は「読書アンケート特集」掲載の1・2月合併号(二月一日発行)です。各界およそ一六〇名の方々に、本年にお読みになった中から五冊の書をご回答いただく恒例の特集号です。本誌「みすず」は、原則として郵送による年間購読をお願いしています。一冊三二五円(税込)、一年間の購読料三七八〇円(税・送料込)です。年間購読を新規にお申し込みの際は、購読開始の号を明記いただき「新規」とお書き添えのうえ、郵便振替(口座番号・加入者名は「東京00100-9-195132 株式会社みすず書房」)または切手でご送金下さい。

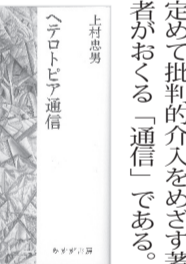
「読書アンケート」特集号のみご希望の方は、切手四〇〇円分(送料込)を直接、みすず書房営業部までお送り下さい。発行次第お送りいたします。

と。彼らの更生を助ける団体 アミティの活動を紹介します。

上村忠男『ヘテロトピア通信』 それぞれの文化がかかえる矛盾を映し出す「鏡」の役割をはたすヘテロトピア。本書は、自らの立ち位置をそこに定めて批判的介入をめざす著者がおくる「通信」である。



坂上香『ライファーズ 罪に向きあう』



坂上香『ライファーズ 罪に向きあう』

Theme 5. 激動の時代と政治思想

世代間の時代精神をも描いた点において、また読む者を惹き込む流麗な展開と筆力に加え、装幀や造本の細部に至るまで

高山裕二 **トクヴィルの憂鬱** (白水社) 2730円

歴史を「物」として提示しながら、あるいはその彼方に、「義」や「理」をそっと仕掛ける

渡辺浩 **日本政治思想史** (東京大学出版会) 3780円

Theme 6. 終戦 内と外

ジグソーパズルの何万個というピースから最適の一片が嵌め込まれていくような説得力があり、著者の語り部としての力量に唖った

鈴木多聞 **「終戦」の政治史 1943-1945** (東京大学出版会) 3990円

戦争から平和へと導かれた「昭和」を冷静な視線で位置づけ、世界のなかの日本の現在に正面から向き合うために

ジョン・ダワー **昭和** (みすず書房) 3990円

Theme 7. 資源再考

いまここにある国内の資源を創意工夫して使いましょう、という資源版〈地産地消〉思想を明治以降で追いかけた本

佐藤仁 **「持たざる国」の資源論** (東京大学出版会) 2940円

豊富な具体例から、1つの明快な答えを導き出し、かつそれがどのような原因によるものなのかを明らかに

ポール・コリアー **収奪の星** (みすず書房) 3150円

Theme 8. ヒトと動物

考えてみれば、これほど受け取る印象にバラつきのある動物も珍しいのではないだろうか

ベルント・ブルンナー **熊** (白水社) 2520円

神聖と邪悪の間にいる。幸運と災いの間にもいる。そして聡明と頑固の間にもいる

デズモンド・モリス **フクロウ** (白水社) 2730円

これは〈危うい本〉である。なぜか K・ローレンツ **攻撃** (みすず書房) 3990円

いままで読みかじった知識、耳学問を総動員して読み進む 山極寿一 **家族進化論** (東京大学出版会) 3360円

Theme 9. ゲーデルを読む

私たち非専門家を一步一步、まさに手とり足とり山頂まで導こうとする著者の心意気

田中一之 **ゲーデルに挑む** (東京大学出版会) 2730円

誤解と誤用をバツバツと切っていく痛快の書である。「こんな本を理解できたら」と

トルケル・フランセー **ゲーデルの定理** (みすず書房) 3675円

Theme 10. 名品・珍品・奇品

日本「現代」美術の来歴をつまびらかにしてくれる、「クール・ジャパン」の必読書!

辻 惟雄 **日本美術の歴史** (東京大学出版会) 2940円

ジャパノロジーの新世紀を画す、これぞ、国際交流の図像学 タイモン・スクリーチ

阿蘭陀が通る (東京大学出版会) 2940円

思い切ってその姿を直視すれば、そこには人間の底知れぬ探求心や一途な思索の跡が見えてくる

加賀野井秀一 **猟奇博物館へようこそ** (白水社) 2520円

大人の本棚

「死ぬことと生きていること」

「今はず、土門拳の若い時分の意見を聴こうではないか。諸君よ! 諸君の若さが素晴らしく感動するものであっても、ぼくの意見にも耳を傾けよう。」

土門拳、六五歳のときに刊行された初のエッセイ集。『デモ取材と古寺巡礼』『スランプを恐れないこと』『アマチュアはなぜ写真が下手か』『手をつかめる風景』……生い立ち、被写体を激怒させた撮影時のエピソード、写真哲学などが率直に、生き生きと語ら



戦後日本の矛盾と、日本人を凝視した眼光が、文章に刻みつけられている。その強靱な写真の謎を、土門拳みずから明かす珠玉のエッセイ解説・星野博美。

『写真論・戦後日本』(四六判・280頁・二九四〇円) 飯島耕一・加藤郁乎『江戸俳諧にしひがし』(佐々木邦心の歴史『外山滋比古編』戸

写真をめぐる考察

既刊より
ロジェ・グルニエ『写真の秘密』宮下志朗訳(二七三〇円) / スーザン・ソントグ『サラエボで、ゴドーを待ちながら』富山太佳夫訳(本紙三面下に広告) / 同『他者の苦痛へのまなざし』北條文緒訳(二一〇〇円) / ロラ・バルト『明るい部屋』花

輪光訳(二九四〇円) / 大島洋アジェのハリ(三三六〇円) / 志水哲也『生きるために登ってきた』(二六・二五五) / 佐藤真『ドキュメンタリー』の修辞学(二九四〇円)

川秋骨『人物肖像集』坪内祐三編 / 『青柳瑞穂 骨董のある風景』青柳いつみ編 / 『谷崎潤一郎 上海交遊記』千葉俊二編 / 寺田寅彦『懐手して宇宙見物』池内了編 / 『宮川淳 絵画とその影』建島哲編 / 『野呂邦暢 夕暮の緑の光』岡崎武志編 / 森於菟『筆硯寸前』池内紀解説 / 山田稔『別れの手続き』堀江敏幸解説 / ローザ・ルクセンブルク『獄中からの手紙』大島かおり編 / 湯川秀樹『本の中の世界』池内了解説 / 庄野潤三『ガンピア滞在記』坂西志保解説 / 原田治『ぼくの美術帖』 / 小山清『小さな町』宮田昇 / 新編 戦後翻訳風雲録 / 吉屋信子『私の見た人』 / 石田五郎『天文屋渡世』和田英『富岡日記』森まゆみ解説 / 小堀杏奴『のれんのぞき』 / 岩田宏『アネキルコ村へ』 / 板折久美子『美しい書物』(各二五二〇・二九四〇円) *本年刊行の書は、本紙二・三面下に広告掲載しています

書評コラム

「知らなかった」という言葉は、そう言えればどんなに気が楽か、と多くの人が思ったとき、堰を切ったように発せられ、いつしか事実となる。

戦争中、ユダヤ人などのマイノリティーが隣近所から消えていったことを、当時の大人たちはどう受け止めていたのかを、当時子供だったドイツ人のまなざしを通して探る。本書はそうしたエピソードを連ねた短編集だ。入り口の敷居は低い。

池田香代子 G.パウゼヴァング 《そこに僕らは居合わせた》



「知っていた」という事実が近づいてくるからだ。近所の出来事である以上、皆が見て知っていた。ある商店で人々が急にツケで買い物をし、しかも精算をしなくなった。無人とな

然たる事実となっていく。それはつらいことだ。なぜなら、追求する人とされる人は多くの場合肉親であるうえ、どちらにも偏らない語り口によって、追求される側の人々が人ごととは思

ったお屋敷の家具が運び出された。住人が姿を消したアパートに、新しい住人が引っ越してきた。それは、元の住人は決して戻ってこないから。あるいは、今はまだいても、いずれ永遠に

ちの、よく知らない戦争へのもやもやとした感覚がクッションの働きをして、激しい対立を回避させている。その結果、正義の立場からの居た高な告発や断罪とは異なる、けれどもしりりと堪える歴史の事実が、痛みをもって確かに次世代へと

著者は、戦争を問う作品を書きついでできた。これは、高齡に達した著者が、どうしても書きたかった一冊だろう。最大の敬意と祝福を捧げたい。

戦後世代から戦中世代への追及は断絶を生む。ドイツの団塊の世代とその親世代のあつれきは、まさに闘争だった。けれど本書には孫の世代も登場する。孫た

いなくなるから。そのことを、皆が知っていた。

翻訳家 (いけだ かよ) *『北海道新聞』9月23日掲載の書評を再録しました ▼グールドン・パウゼヴァング『そこに僕らは居合わせた』(本紙四面下に広告)

『パブリッシャーズ・レビュー』のご案内 『パブリッシャーズ・レビュー』は、東京大学出版会(5・11月)、白水社(1・4・7・10月)、みすず書房(3・6・9・12月)の3社が、各月15日に発行する出版情報紙(無料)です。ちょうど1年前の2011年12月に創刊いたしました。ご希望の方へ無料でお送りしています。送付のご希望は、発行の社ごとにお受けいたします。お手数ですが、本紙『パブリッシャーズ・レビュー みすず書房の本棚』のお申し込みは小社へ、『パブリッシャーズ・レビュー 東京大学出版会の本棚』『パブリッシャーズ・レビュー 白水社の本棚』はそれぞれ東京大学出版会、白水社へお申し込み願います。発刊記念の3社合同ブックフェア《レビュー合戦》を、先月より全国の書店約50店で開催しています。足をお運びいただけましたら幸いです。本面下に広告を掲載しています。なお、広告中の書籍についてのご注文・お問い合わせはそれぞれ発行の社へお寄せいただけるようお願いいたします。

本紙6月15日号で紹介しましたブランコ・ミラノ『ヴィッチャー 不平等について』が先月刊行をむかえました。史上最高のお金持ちたちはだれか? グローバリゼーションで世界は不平等になつたのか? 現代のアメリカと古代ローマ帝国の所得格差はどれほど違うのか? など、数多くの思い込みを数字で覆し、正確に理解するための必須知識を与えてくれる一冊(本紙五面下に広告)。

『W・ブライアン・アーサー』テクノロジーとイノベーション』有賀裕二監修・日暮雅通『経済学に新しい概念を導入してきた鬼才が語る、テクノロジーの生態学。新技術はどこから生れ、どこへ行くのか? 未来を見通すための枠組みがここにある。』我々は彼の理論に基づいて「as」を投入したE・シユニット(Google社会長(三三八五円))

「パブリッシャーズ・レビュー」発刊記念 レビュー合戦 白水社 x みすず書房 x 東京大学出版会 Theme 1. 本の森、知の泉 図書館 愛書家の楽園 (白水社) 3570円 Theme 2. 野生に学ぶ 登山家 サバイバル登山家 (みすず書房) 2520円 Theme 3. 戦争とその暗部 モスクワ攻防 1941 (白水社) 3780円 Theme 4. 小さな瞳がとらえたアウシュヴィッツ 14歳のアウシュヴィッツ (白水社) 2730円 知の広場 (みすず書房) 2940円

日系ブラジル移民研究の集大成。長期取材と徹底した踏査にもとづく決定版、待望の刊行なる。

様々な「切実さ」に駆られ、創作に時間と思いを捧げた日系移民たちは、そこにいかなる報いを求め、なにを籠めたのか。小説、詩、俳句、短歌、川柳と各ジャンル別に生存の足場を追跡した、言語をめぐる移民の社会史。

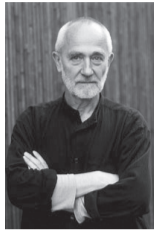
博學多才の筆致で、日系移民の全体像を見事に浮かび上がらせる。人物像、生き方、異色の作品紹介など、読みどころ満載の力作。知られていなかった膨大な史実に言及、引きつける書きぶりで心に迫る内容。

巻末に、作品一覧(概要紹介)と詳細な年表を付す。全二巻で約三〇〇の写真・図版を収録。文化史、移民研究、文学研究にたずさわる人々、必携の大著。全篇書き下ろし。

全篇書き下ろし、研究の集大成

細川周平
《日系ブラジル移民文学 日本語の長い旅 全2巻》
I 歴史 / II 評論

第I巻「歴史」はじめに——凡人と文人 序 文学する人たち 1 小説——書きもの記録 2 詩——青年の言葉が老いるまで 3 俳句——結社組織の移植 4 短歌——大きな椰子の樹の下で 5 川柳——おかしき熱帯 6 歌謡——裾野の裾野であとがき——切実な読み書きについて



Peter Zumthor ©Gerry Ebner

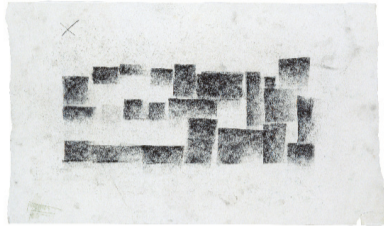
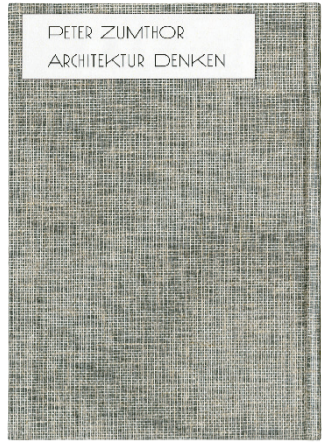
ペーター・ツムトア 鈴木仁子訳

ツムトア氏ディレクション、限定300部

建築を考える「特装版」

「図版なしで掲載してほしいのだが。最近、図版があると、人はそれしか見ない。インタビュアーのだから、読者はそれを読むべきだ。読むとはなにか洗練された行為、崇高な行為なのだから。(…)

あるインタビュアーの口火を切っている。原書では多数のآوریエの写真とともに構成された本書も、邦訳刊行に際して、「エッセイ集のように読むだけの本として作ってほしい」というのが氏の要望だった。その文体からは、ツムトアがどれだけ真摯に、「なにかを感じた経験」を言葉で写し取ろうとしているかが伝わってくる。書かれたものは、読まれ、残り、伝わる。自分の仕事をリスベクトし、創造



【特別付録】ツムトアの建築ドローイング「Drawing for Thiermeier Vals」(コロタイプ)

美、風景、光について——創造において信じていること、実在させたいと願うものへの想いが綴られた第一エッセイ集。読者から「何度も読み返したい」「常に手元に置いておきたい一書」などの反響が寄せられている本書を、ツムトア氏ディレクションの造本による特装版でお届けする。表紙には、奈良の古式織機で織られたクロスを使用。ブックデザインは葛西薫、表紙テキストは須藤玲子(NUNO)。「建築・デザイン・美術」(十二月二十一日刊)(A5変型判・120頁・クロス函入・コロタイプ一葉付・限定300部・一五七五〇円) *A4チラシ呈 営業部まで

の秘密に触れたいと目論んでいる人たちに、「ここに書いたことが私のすべてだよ」と語りかけてくるような、そんな不思議に濃密な本だ。 美、風景、光について——創造において信じていること、実在させたいと願うものへの想いが綴られた第一エッセイ集。読者から「何度も読み返したい」「常に手元に置いておきたい一書」などの反響が寄せられている本書を、ツムトア氏ディレクションの造本による特装版でお届けする。表紙には、奈良の古式織機で織られたクロスを使用。ブックデザインは葛西薫、表紙テキストは須藤玲子(NUNO)。「建築・デザイン・美術」(十二月二十一日刊)(A5変型判・120頁・クロス函入・コロタイプ一葉付・限定300部・一五七五〇円) *A4チラシ呈 営業部まで

夜と霧 新版 V. E. フランクル 池田香代子訳	¥1575
長い道 宮崎かづ系	¥2520
人生と運命 2・3 ワシーリー・グロスマン 齋藤紘一訳	各¥4725
私の西洋美術巡礼 徐京植	¥3150
フェミニズムの政治学 岡野八代	¥4410
貧乏人の経済学 A. V. パナジー/E. デュフロ 山形浩生訳	¥3150
ピダハン D. L. エヴェレット 屋代通子訳	¥3570
シナプスが人格をつくる J. ルドゥー 森憲作監修 谷垣暁美訳	¥3990
小石、地球の来歴を語る ヤン・ザラシーヴィッチ 江口あとか訳	¥3150
角運動量とスピン——『量子力学』補巻 朝永振一郎	¥4410

スピアック教授 京都賞

第28回京都賞(思想・芸術部門)を、ガトリ・チャクラヴォルティ・スピアック教授が受賞しました。

スピアックは欧米思想を根本から問い直し、人文学で大きな影響を与え続けています。インド国籍のままアメリカで教鞭をとり、世界各国で対話を試み、インドやバングラディッシュの農村で教育活動を継続して行なうその理論と実践には大きな共感が寄せられています。

各巻四刷出来(本紙二面下)に広告掲載しています。

息長く読み継がれていくロングセラーが生まれることを切に望んでいます。

郷愁、ことば、芸能という主題を軸に、日系移民の歴史文化の全体像を見事に描く。サイードらを引きつつ論じる故郷の考察から、日系社会弁論大会、独特の展開をした芸能のことなど第60回読売文学賞受賞の傑作。(五四六〇円)

「これを読まずして、現代小説のことはおろか、現代世界のことも語れないのではないか」(毎日新聞)、「描写は生彩にあふれ、何よりも人物たちが生きていく」(日本経済新聞)。

毎年この時期に作成している総合図書目録ができあがり、小社営業部まで、どうぞお早めにお申し込み下さい(〒113-0033文京区本郷5-32-21)。

日本翻訳文化賞受賞 『人生と運命』全3巻

ワシーリー・グロスマン「人生と運命」齋藤紘一訳(全3巻)が、過去一年に優れた翻訳書を刊行した翻訳家を表彰する日本翻訳文化賞(日本翻訳家協会主催、二〇一二年度第49回)を受賞しました。

「これを読まずして、現代小説のことはおろか、現代世界のことも語れないのではないか」(毎日新聞)、「描写は生彩にあふれ、何よりも人物たちが生きていく」(日本経済新聞)。

みすず書房 営業部だより

年の瀬も押し迫り、一年を振り返る時期となりました。書店の店頭では、今年話題となった本を集めたフェアやクリスマス用のデコレーションなどが目を引き、年末に向けての総決算という雰囲気を感じます。出版界にとつては厳しい状況が続きますが、来年に向けての仕切り直しとなればと思えます。

「これを読まずして、現代小説のことはおろか、現代世界のことも語れないのではないか」(毎日新聞)、「描写は生彩にあふれ、何よりも人物たちが生きていく」(日本経済新聞)。

部六〇〇円に送料八〇円、計六八〇円分の切手を同封し、小社営業部まで、どうぞお早めにお申し込み下さい(〒113-0033文京区本郷5-32-21)。